

常なる磐

つねなる いわ

令和2年4月30日(木)号

◇ウメノキゴケ

校内の樹木をぼんやり眺めていて、気づいたことがある。幹の部分が一般的な茶色ではなく、緑白色に見える。近づいてよく見ると、キノコ状のかさぶたのようなコケが付着していることが分かった。付着量は異なるが、ツツジやクチナシの小木から、立派なモクレンや銀杏、黒松に至るまで、様々な樹木に発見できる。特に、春の本校を彩る桜（ソメイヨシノ・荘川桜）に至っては、隙間なくびっしりと。「樹木流コロナか…」と、心配になって調べてみた。

キノコ状のコケの正体は「ウメノキゴケ」。本校にも梅の木はあるが、梅より桜に付くのには理由があった。弱っている樹木に自生するのがウメノキゴケ。さらに、樹木には害を与えていないことも分かった。

気になることがあり、帰路に就く際に上米河内バス停に立ち寄る。大桜には、幹にほんのわずかなコケが見られたが、本校の桜には枝先にまで確認できる。本校の桜が弱っていることが明らかになった。

調べてみて、安心したこともある。この「ウメノキゴケ」は、「大気汚染の指標」。つまり、空気が美しいところでしか発生しないということ。本校の自然環境のよさを改めて知ることになる。

害を与えているものではないと分かったものの、やはり気になる。何かいい手はないかと職員と話していたところ、校務員の山田さんから高压洗浄機が有効だという情報をもらう。早速、コケの除去に取り掛かった。

作業をしながら気づいたことがある。一つは、桜の傷み具合である。「桜は切ったところから傷んでくる」と言われているが、まさにそのとおりだった。

しかし、弱っている桜も黙っていない。ウメノキゴケの間から、新芽を芽吹いていた。この大切な新芽を避けようと流水を当てるものの、時折当たってヒヤリ。しかし、驚いた。新芽はびくともしないのだ。水圧は10キロに迫る激しさがある。それでも、全くびくともしない。生きる力強さがあるのだ。

このとき、桜の新芽と子供たちの姿が重なる。新型コロナの関係で、学校への登校もままならない。子供たちの中にたまった見えないストレスも相当なものだろう。しかし、限られた登校で学校に過ごす姿からは、そうした心配をみじんも感じさせないたくましさがある。二つ目の再発見。子供たちは、まさに、次代を担う日本の宝である。

今は、加藤先生、山田さんの3人で「ウメノキゴケ」の除去にあたっている。コケに覆われていた幹が表れ、日光に照らされた姿を見ると、元気が出てきたようにさえ見える。何より、本校の名物桜に愛着が感じられることがうれしい。

桜の寿命は50年と言われる。本校は移転34年。しかし、あと16年とは言えない。手をかけ、目をかけ、大切にすることで、新芽は芽吹き続けるのだ。